

## 2015年の四旬節を…どのように生きる？

イズコ神父

『四旬節』の道を歩み始めます。復活されたイエスキリストに目を向けながら。キリストの復活は私たちの信仰生活の中心ではありませんか？その土台をのぞいたら、キリスト教の建物は倒れてしまいます。それを信じると案外すべては立っているものです。

その大きな神秘、揺るがない希望を与えるキリストの復活を祝うために、特別な節が定められており、それは『四旬節』です。時代が変わって私たちの世界はときどき暗くなります。イスラム国、ウクライナ、ボコハラム、パリの恐ろしいできごと、ひどいおどし…とかによって、人間の弱さを深く感じています。ちょうど今『四旬節』に入るように招かれているのは、何か意味があるのではないのでしょうか？

『四旬節』というと、すぐ断食、修行とか頭に浮かぶかもしれませんが、世界の状態が変化していきますし私たちの見方も変わっていきます。聖書の中の『断食』『施し』『祈り』というような言葉は私たちをまいごにしてしまうかもしれません。今の世界はそのようなものを必要としていますか？今の社会の問題は断食によって、施しによって、救われるのでしょうか？その三つの言葉は何の意味を持っているのでしょうか？たぶん皆さんは新しいこと、希望に満ちた答えを見つけ出すことができるでしょう。

① 祈り…あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい… (マタイ 6・6～9)

四旬節の間 教会によって一番すすめられる道はこの祈りの道です。どんな祈り？やっぱりイエスキリストにとって、祈りというのは言葉をふやすことでもなく、悲しい顔を見せることでもなく、祈りの心は…自分の本音にかえって、神様を信頼して、父である神の手に自分を委ねて、私たちの本当の存在を見つけること。

② 断食…あなたは断食するとき、頭に油をつけ顔を洗いなさい。それはあなたの断食が人に気づかれず… (マタイ 6・17～18)

この断食への招きは私たちを考えさせる挑戦的な招きだと思います。何を失ったらいいでしょう？食べ物？飲み物？いらぬもの？私を疲れさせるもの？それよりも識別をして基本的なもの、一番大切なものを思い、それに反対するほかのものを捨ててもいい…という断食ではないのでしょうか？このように私の生活のコントロールを失わないで、また新たに喜んで道を歩むこと。

③ 施し…あなたは施しをする時には偽善者たちが人から褒められようと会堂や街角でするように自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない… (マタイ 6・2～4)

この世の中に一人で生きる人はいない。離れた修道院に逃れる修道者たちでも。一人で祈るときに『私たちの父よ』と言わなければなりません。断食すれば必ずパンもなく、ほかの食べ物もない人、人間にふさわしい生活を送ることができない多くの人々のことを思わなければならない。そしてそれを思い出すと私たちの心の中で兄弟的な愛が生まれ、絆が強められるのではありませんか？人間は皆神の子である、という意識から、食べ物も生活のたまものも時間も分かち合う心が生まれることにならないのでしょうか？この世の中で、私は一人ではない。道を歩きながら兄弟のうちにキリストの姿が見えるようになります。

教皇フランシスコとともに言いましょう『主よ私はまちがっていました。何度もあなたの愛から逃げ

ました。しかし今私はもう一度あなたとの約束を更新するためにここにいます。主よ、あなたを必要としています。もう一度あがないの腕に私を受け入れ、救い出してください』(福音の喜び3)『福音は何よりも私達を愛し、救ってくださる神に応え、他者の中に神を見出し、すべての人の善益のために自分から出ていくようにと招くのです…』(福音の喜び39) 豊かな四旬節を！